

《今朝の聖書から》『ルカによる福音書』4：14～が今朝の聖書箇所です。この箇所はイエス様の、キリストとしての就任に関する記録からなされています。そしてガリラヤ伝道が開始されるのです。ナザレから上京し、任職にのぞみ、ナザレの村に帰ってこられるというながれです。任命したのは“聖霊ご自身”であったことが判ります。“それからイエスは御霊の力に満ちあふれてガリラヤへ帰られると、そのうわさがその地方全体にひろまった。”と4：14に記されています。会堂で預言者イザヤの書が開かれ、イエス様はそれを朗読されますが、18節19節をみると、ルカが、如何にメシヤの到来が“今だ”ということ強調したかったかが分かります。聞いていた人々も、その素晴らしさに聞きほれていました、尊敬もしていました。15節ですでに“イエスは諸会堂で教え、みんなの者から尊敬をお受けになった”とある通りです。しかし人々の魂は“神の国がやってきた”ということと同時に、不思議な体験をするのです。まさしく、根本的な人間の在り方である、霊において“すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆して言った、「この人はヨセフの子ではないか」(22節)”がその中身です。恵の言葉に感動しながら“この人は(ただの)大工の息子ではないか”というのです。“大工の子”は尊敬を確かなものとする言葉ではなく、イエス様の権威を否定したいという目的で用いられています。何を意味するのでしょうか。聖書は聖書でそれなりに、良い書物だとは思いますが。しかし私は聖書の“救い”だけを信じて生きて行けない、という“つまずき”をも示しているようです。この“つまずき”こそ、福音が直面するだろう歴史を示しているのです。私たちがつまずいてばかりいたのでは、“主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の報復の日とを告げさせ・・・”とイザヤ書61章にあります。心を頑なにするのではなく、年のやってきたことに敏感になりましょう。

週報

2006年 12月 10日



主の業に励もう コリント15:58

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

教会学校	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル商会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎0543-45-4070 E-Mail grace@big.jp

牧師 村上定幸